

■(小泉)清水郁子 教育家。「男女共学論」など教育評論で活躍中、全てを捨てて清水安三に協力し、“桜美林学園の母”に。
しみずいくこ
大本教・・・1892＝ 島根県八束郡津田で、旧松江藩士で維新後郵便局長となった小泉有本の娘に生まれる。

日清戦争始・1894＝ 2歳：
日清戦争終・1895＝ 3歳： 他家に養女として出され、牛馬のように扱われるも、

 聡明さが次第に評判となり、
政党内閣初・1898＝ 6歳： 実母の希望で再び実家に帰り、兄妹全てが中高等教育に進む環境に入り、尋常小学校に入学。

 東京女子高等師範を卒業し松江高女の人気教諭となった長姉に憧れて、女学校教師を志す一方、
田中正造直訴1901＝ 9歳： バクストンが設立した教会でキリスト教に触れる。

 懇望されて海軍士官と結婚した長姉が肺結核を発病し、3年の闘病の後、
日露戦争終・1905＝12歳：
満鉄発足・・・1906＝13歳： 松江高等女学校に進んだ年、長姉が死去。

 長姉の志を継ごうと父を説得し、
韓国併合・・・1910＝18歳：
大逆事件判決1911＝19歳： 東京女子高等師範学校に入学。
明治天皇没・1912＝20歳：

 平塚らいてうの講演を聞いて感銘を受け、誘われて壱岐坂教会に行って海老名弾正に魅せられるが、次第に
 対蹠的な東京富士見町教会の植村正久に通うようになり、
21ヶ条要求・1915＝22歳： 受洗後、卒業。闘病の後、
民本主義・・・1916＝23歳： 長崎県立高等女学校教諭に赴任。
第一次大戦終1918＝25歳： ユニークな自由教育で知られた兵庫県立明石女子師範学校教諭に栄転するも、進むべき道に悩み、
 辞表を出して、母校東京女子高等師範の研究科に入り、
ベルサイユ条約・1919＝27歳： 女子入学が認められていない東京帝国大学文学部の聴講生となる。
 この間、山室軍平の説教に感動し、その助言により、
原敬首相暗殺1921＝29歳：
水平社結成・1922＝30歳： 渡米して、サンノゼ救世軍士官学校に籍を置き、

 護憲三派圧勝1924＝32歳： オペリン大学神学部に入學。そこで、清水安三夫妻と知り合う。

 ミシガン大学大学院に学ぶ。教育学を専攻し、
共産党事件・1928＝36歳：
 学位を取得して、
海軍軍縮条約1930＝38歳： 帰国。青山学院女子専門部教頭兼教授に就任。かたわら新進教育評論家として活躍、
満州事変・・・1931＝39歳： 「男女共学論」を刊行。以降2冊と合せて男女が対等な独立的人格者であることを基礎とした“男女協調”の社会の実現に役立つ女性を育てることを目指し、のちの占領軍の対日政策に影響を与えたといわれる。
国際連盟脱退1933＝41歳： 「明日の女性教育」を刊行。ハワイで開かれた第3回汎太平洋婦人会議に日本教育者代表として出席。
帝人疑獄事件1934＝42歳： この年まで独身を貫いてきたが、前年に妻を亡くした清水安三から再婚相手のプロポーズを受けると、
芥川直木賞始1935＝43歳： 「女性は動く」を刊行。
二二六事件・1936＝44歳： *青山学院女子専門部教授を辞職するなど、それまでの栄光を投げ打って中国に渡り結婚。以後、安三が15年前に中国北京市の朝陽門外に設立した中国北京の{崇貞女学校}の教育と経営の一切を任されると、安三の前妻の遺児たちとの間に困難はあったものの、学園への取組みは完璧で、{崇貞女学校}を小学校と中学校として正規のものに昇格させ、新たな校舎群の完成とともに、{崇貞学園}と総称して飛躍させ、

日中戦争始・1937＝45歳：
第二次大戦始1939＝47歳： 日本基督教連盟婦人部が北京の巨大スラムに開設した{愛隣館}の現地主役となるが、
日米開戦・・・1941＝49歳：

 敗戦により一切を失い、
敗戦・・・1945＝53歳： 敗戦により一切を失い、
新憲法公布・1946＝54歳： 帰国すると、賀川豊彦の助力を得て、夫とともに、東京町田に{桜美林高女}を創設し、初代校長となる。
新憲法施行・1947＝55歳： 敗戦後の逸早い開校で多くの応募者があり、GHQによる教育改革で共学が認められ、{中学校}に切替え、
 崇貞学園の精神を継承しつつ、キリスト教精神に基づく国際的な人材の育成を目指し、経営は困難ながら、
 様々な寄付・寄贈もあって、奇跡的スピードで充実して行く。
朝鮮戦争始・1950＝58歳：
独立回復・・・1951＝59歳：

 短期大学を発足。

 55年体制始・1955＝63歳：

 インスタントラーメン・1958＝66歳： 卒業式最中に出火し、講堂と食堂が全焼。

 安保闘争・・・1960＝68歳：

 全国総合計画1962＝70歳： 大学設立に向けて準備を開始するが、

 東京リベンジャーズ1964＝72歳： 過労のため、その実現を見ないうちに、脳溢血で倒れ没した。

山崎朋子「朝陽門外の虹」、